

ビッドル来航③

弘化三（一八四六）年六月二日、老中阿部伊勢守と青山下野守の連名の諭書が浦賀奉行へ届いた。そこには「我が国と交易をしたいという旨であるが、我が国は新たに通信・通商を許すことを固く禁じているので、早々に帰帆しなさい。この後幾度きても願いは叶わず、無益なことである。また、外国の事は長崎で扱うことになっているので、この地（浦賀）では願い事があっても通じないので、再びここへ来てはいけない」と記されていた。

浦賀奉行の大久保と一柳へは、この諭書の意をくみ、異国船へ通達し、早々に帰帆させよと命じている。

こうした結論になるであろうことを予測していた浦賀奉行所は、ビッドルに対して通達より先に艦隊で不足している物資のプレゼント作戦を繰り広げた。まずビッドル艦隊では水が不足していることを聞いていたので水を運んだ。ところが喫水の高さに大きな隔たりがあり、水を運び上げることが困難であることに突き当たった。そ

こへ艦から帯のようなものが降りてきて、水船の水溜まりへ入った途端、帯は膨れ上がり、水が下から上へと吸い上げられていったので大いに驚いた。これがポンプとホースを見た最初のことであった。

ビッドル艦隊へ積み込んだリストが残っているが、お米、梨、りんご、瓜、さつま芋、鶏卵、鶏など二十一種類の食料品と丸太や角材、薪など総額四十両以上であった。

ちなみに鶏卵は二千三百五十個積み、この代金が二十九貫三百七十文余であった。卵は百文で八個という計算になる。これが大根だと百文で七十本、りんごは三十八個買えた。卵がいかに高いものであったことがよくわかる。

六月二日に諭書が届いて以来、浦賀奉行所では万一の事態に備えていた。六月五日、大久保・一柳両奉行は、与力中島清司と田中信吾を幕府（浦賀奉行）の使者としてビッドル艦隊に派遣した。この船にはペリー来航でも活躍する堀達之助が通詞として、また補佐役として同心の福西源兵衛と臼井進平が同乗した。

さらには使者のほか、川越藩、忍藩の代表と浦賀奉

行の秘書官である用人がビッドル艦隊に乗り込んで、これからの動向を固唾を飲んで見守っていた。

陸上で警備にあたっていた中島清司の倅三郎助などは、家を出る時には水盃で別れを告げ、辞世の句まで残しているほど、決死の覚悟で臨んでいた。

プレゼント作戦が功を奏したのか、ビッドルは諭書を聞くと、ビッドルは予め予測していたかのように、異論を唱えることなく「通信通商の意志がないことがわかったので、順風になり次第出帆する」という英文の受書を渡した。

六月六日は天候不順で出航できなかったが、七日朝巳刻（午前十時ごろ）ビッドルが率いるコロンバス・ヴェンセズは出航していった。

艦隊の姿が見えなくなると浦賀湊周辺を警備していた川越藩・忍藩をはじめ、房総半島の各藩も警備を解き引き上げていった。また、三浦半島各地から徴用されていた漁船や農民も順次任務が解かれ、長い十日間は幕を閉じた。

ビッドル艦隊の出現は、幕府の江戸湾警備のありかたを根本的に見直しが図られることになり、浦賀奉行所で

は一丸となつて、大型軍艦の必要性を強調した。

これによって江戸湾はお固め四藩体制にし、親藩以外の彦根藩に三浦半島の南端から江ノ島までの警備が命じられた。（了）